

山村地域振興のための提言

——檜原村での経験から——

中 島 保

私は、東京都檜原村を見てきた経験からということで、本日発表させていただきます中島と申します。よろしくお願いします。

まず、自己紹介を簡単にした方が非常にわかりいいかと思います。私は昭和12年生まれで、50歳を過ぎたという年になっております。小学校は東京の武蔵野で出まして、中学校は杉並区立の宮前中学校を出ました。高校は都立の石神井高校へ行きました。大学は東京理科大学の物理学科というところを卒業いたしました。

この檜原村に至るまでに、いろんな話があるのですが、中学校時代は野球をやっていました。高校ではサッカーをやりました、大学では山岳部と、転々といろんなところに手を出すというようなことでもございました。

檜原村にたどり着いたいきさつは、学校を出まして、日野自動車工業株式会社というのが東京の西の日野市にあるのですが、そちらに昭和37年に就職したのです。日野自動車の品質保証部というところで、17年、車関係の品質保証の仕事をしておったのです。昭和54年に、羽村町に日野車体という、トラックのボディを作っているところに出向になりました。

その出向先で檜原村に住まわれている人がいまして、村の話をされ、それじゃ、私も見てみたいということで、早速、次の週に檜原村に行って「ああ、ここで生活してみたい」と思いまして「ぜひ」と言いましたら、やはり山村で非常に過疎化ということで、あいている家があるよということで、一夏そこを借りまして、それから徐々に地盤を広めていったような形で、翌年には、その近くに小さな小屋を建てて、地域のいろんな活動に移った

ということでございます。

それでは、まず檜原村の説明をしたいと思っています。東京の過疎地という形で言われているのですが、過疎ではなくて、実際に、昔から人口もそれほど大きく変更していないというのが檜原村でございます。

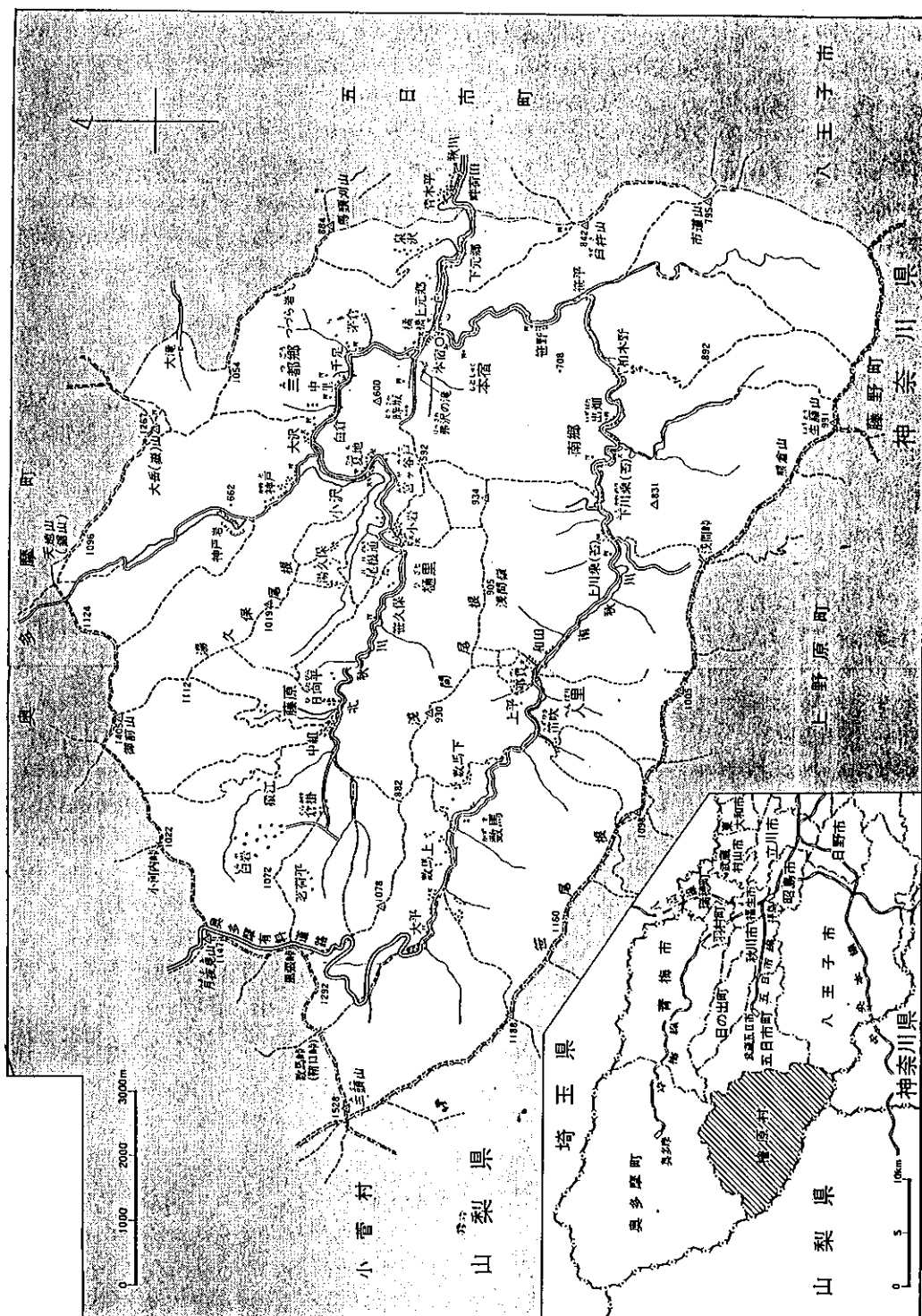
地図を見ていただくとおわかりだと思いますが、簡単に説明しますと、檜原村は東京都の一番西にあります。島を除いて、村というのは、ここの檜原村だけということでございます。役場のあるのが北緯35度43分、東経130度09分で、村の中心になると考えてください。村境には稜線がぐるっと回って回って、北面は奥多摩町と接しております。三頭山は檜原村の最高点で標高1,528mであり、山梨県との交点でございます。

南面には笹尾根という稜線がのびており、ここから南側が神奈川県の上野原町というところで、山にぐるっと囲まれています。東側だけがあいている。

東側のあいているところは五日市町に接して、先日来、五日市町は、テレビなどでにぎわったのですが、それから約9kmぐらい奥に入ったところが檜原村の中心です。東西方向に約14km、南北に約10kmの面積を持っております。

真ん中に1本、浅間尾根という大きな尾根が横たわっておりまして、この尾根で秋川が二分されている。北の谷と南の谷となっておりますが、この川の一番低いところが五日市町との境で標高224.5mということです。檜原村は、標高差が1,300mぐらいのところに30の集落が、川に沿って点在しております。

数馬部落というところは兜造りで有名で、



第1図 檜原村

檜原村では、皆さんがよく泊まったりする場所なんです、ここは標高 650 m から 750 m ぐらい。この部落も、かなり下の方から山の上まで、歩いて 20 分ぐらいのところまで、家が点在している。

藤原部落、ここについても標高約 800 m 付近で、奥の猿江集落まで、約 1 時間ぐらい歩かなければ行けないという場所もございます。山また山で、非常に平らな面がないというところがございますが、ちょっとスライドでどんなところかを見ていただきたいと思います。スライドは、村のイメージをもっといただくと、サーッと送っていただきたいと思ひます。

秋川はこういう形で、これは自動車道路から見のんですが、かなり切れ込んだ谷が非常にあって、この周りがすぐ山に持ち上がってしまうということで、村の約 93% ぐらいが山林に覆われているということでございます。〔スライド 1〕

これは秋川の秋の景色です。〔スライド 2〕

これも谷間の村ということで、ちょっとイメージしていただければいいかと思ひます。〔スライド 3〕

これは、カタクリの花で、村には野草が非常に多いということで、宝庫だといわれています。〔スライド 4〕

これは兜造りの家です。まだカヤぶきの家がかなり点在しているんですが、こういう兜のような形で、昔は 2 階で養蚕をやっていたということです。養蚕がすたれて、桑の木をほとんど切ってしまったので、ある一時、蚕が再びぱっと栄えたのですけれども、そのときは、村では昔のように養蚕ができなかったということがあります。〔スライド 5〕

これは、ちょうど村の中央に総合グラウンドを一つつくりまして、学校ができたときの写真でございます。山を 10 m 単位で階段状に切って行って、50 m 切り開いたのですが、その造成費だけで約 3 億円かかったときいて

おります。檜原村にはグラウンドがこれ一つだけということです。〔スライド 6〕

これは本宿部落という村の中心で、割合に広いところなんです、こんな形で山にへばりついて家があります。〔スライド 7〕

自動車道路から離れていくと、こういうふうに家かなり点在して、道が細いのでバイク程度しか走れないという状況です。〔スライド 8〕

これが、小学校の数馬分校で、こゝしは 20 人在校生がおりますが、来年は 21 人ということで、こゝし 6 年生が 4 人卒業して、来年は 1 年生が 5 人入ってくる。来年は 6 年生が 1 人もいないという状況です。〔スライド 9〕

これが奥多摩有料道路から見た檜原村の谷の様子です。〔スライド 10〕

これはカナダからの輸入材を使って組み立てたログハウスで、こういうものが最近できつつあるということです。ドライブインです。〔スライド 11〕

これも、村には平らな土地が非常に少ないので、清水の舞台じゃないんですけれども、電柱で足を組んで、斜面にせり出して土地を 4、50 坪造成しております。〔スライド 12〕

檜原村は昔、林業が盛んで、製材所が 20 軒ぐらいあったんですけれども、今では全部で 5 軒ぐらいになってしまった。原木の杉も埼玉県とか山梨県とか、他県から買ってくるのが多く、ここで製材だけをしているというのが現状で、あとは、輸入材もここで加工しており、製材所もさびれてしまいました。〔スライド 13〕

檜原村で唯一の田んぼです。面積 40 a です。

ここのみしか田んぼはありません。檜原村へ行っていただくと必ずわかるのですが、山峡ゆえ、2 軒並んで平らなところは、割にないような場所です。〔スライド 14〕

これが、こゝしの 4 月にオープンになる東京都民の森という憩いの場所で、五つのゾー

ンから成っており、この中では、野鳥の森だとか、いろんな自然観察ができます。子供たちの勉強の場ということで、約34億円をかけてつくられたそうです。〔スライド15〕

これも、その都民の森の最後の仕上げの状況で、2週間ぐらい前に撮った写真です。〔スライド16〕

村の至るところで、こういう間伐材みたいなものを切っています。その作業状態です。〔スライド17〕

これは、防災の関係で、檜原村の一番奥なんですけれども、こういうところにヘリポートをつくりまして、何かの緊急のときにヘリコプターで物を輸送するという非常に不便なところで、今後、この辺が開発されそうだなということも考えますが、将来は奥多摩道路からつながるだろうと思われています。〔スライド18〕

これは、つり橋が幾つかあったのですが、今は村では非常に危険だということで二つか三つになってしまいました。ちょっと古くなるとみんな外してしまうんですね。〔スライド19〕

これは、今の都民の森の木工館ということで、子供たちの自然発想から素材を切ってきて、ここで好きなように工作をさせようという発想で、木工館だとか、イベント館だとか、いろんなものが今後運営されると思います。〔スライド20〕

これが冬凍るという滝です。払沢の滝というところで、上から下まで約40mぐらいの落差があります。観光の名所になっていて、檜原村の中では割に人が集まる場所です。冬の凍るシーズンにすごく集まって、春と冬が名所になっています。〔スライド21〕

これが氷の全景ですけれども、凍る年にはこの滝つぼは完全に凍ってしまうということです。〔スライド22〕

これも、その完全に凍ってしまう滝ですが、今年はだんだん温暖化傾向で、凍らなくなっ

てきているんですね。ここ2、3年、凍っていません。滝ははじめて凍る日はいつかということで懸賞をつけて、クイズなんかも出したりしているのですが、結局は、今は崩れてもう凍っていません。90%ぐらいまで凍ったんですけれども、写真は80%ぐらいのときです。〔スライド23〕

これは小学校の運動会風景なんですけど、直線で走ると、2、30mで突き当たっちゃう。どうしても50mをやりたいということで、学校の入り口から50mだけ細くコースをつくって、何とか50mの記録だけとろうというのが現状です。あとは小さな、本当の幼稚園程度のグラウンドしかなかったということです。最近ちょっと広げたのですが、学校の風景です。〔スライド24〕

これが本宿のそばにある採石場。ここから山砂利を出しているのですが、東京都の首都高速道路建設の時にもこの辺の骨材が使われました。この付近は、非常にほこりが上がってしまっていて、公害と思われますが集落の中間にあたるため、お金が稼げるのだからしょうがないという感じで、我慢させられているような場所です。〔スライド25〕

これは本宿中心街なんですけれども、吉祥寺というお寺のところから見た景色です。〔スライド26〕

これも、吉祥寺というお寺の風景です。かなり傾斜がきつくて、裏山がすぐ立ち上がってしまうということです。人工林が非常に多いところ。〔スライド27〕

檜原村に入るところに、これより檜原村ということで、建築に関しては無指定地区で、300坪以下はどんなものも、どんなふうにも建てていいよという建築の許可が緩和されるようなところ。〔スライド28〕

これは川の風景と、周りに非常に山がせまっているということを頭に入れていただきたいと思います。〔スライド29〕

これは檜原村の役場です。今、役場という

のは、ほとんどどこへ行ってもホテルみたいだと思いますが、ここは木造で考朽化しているような、非常にお粗末と言えお粗末なんです。そういう役場が本宿というところがあり、村の中心になっています。アンテナは防災放送用で、放送設備は完備されておりますけれども、建物はちょっと時代遅れです。近いうちに、建てかえの予定はあるようです。〔スライド 30〕

これは秋のお祭りの風景で、各集落でお祭りが全部違っていまして、9月になると一斉にあるとか、3月ごろにあるということで、これは人里部落の獅子舞いのお祭りの風景です。〔スライド 31〕

これは笹野部落のお祭りですけれども、式三番という……。〔スライド 32〕

これは本宿部落の山車で、古い山車の通るところで、電線なんかかなり持ち上げています。植木等の障害物を上へ持ち上げないと通れないということで、山車の屋根の上に人が乗って、お祭りをやっています。〔スライド 33〕

お祭りでは小学生ぐらいから踊って、村全体がみんな盛り上がる。一般のお祭りだと遠くてよく見えなかったりするのですが、これはすぐさわれるし、乗りたかったら乗ったりできる。すぐ間近で接しられます。〔スライド 34〕

檜原村というのは、こんなものだというイメージをしていたと思いますけれども、その集落も約 30 ありまして、一番小さい集落が、私がいる集落、時坂というところなんです。6 世帯で 24 人しかいないんですけれども、そんな集落もあるということで、かなり分散してばらばらということでございます。

今年 1 月、村全体で人口が 3,911 人ということで、老人ホームが笛吹という部落と、小沢という部落に老人ホームが 2 カ所できまして、急に人数がふえました。いずれも、昔から 23 区コンプレックスというのを非常に

第 1 表 人口及び世帯の推移 (1 月 1 日現在)

年	人 口	世 帯	
明治 28 年	4,257 人	730 戸	
大正 2 年	5,589	830	
昭和 5 年	5,513	1,030	
“ 25 年	6,373	1,157	
“ 35 年	6,084	1,112	
“ 45 年	5,280	1,116	
“ 55 年	4,407	1,090	
“ 60 年	4,184	1,174	老人ホーム檜原苑開設
“ 61 年	4,088	1,160	
“ 62 年	3,987	1,150	
“ 63 年	3,911	1,143	
“ 64 年	3,961	1,244	サナホーム 開設
平成 2 年	3,911	1,243	

資料：檜原村役場資料より作成。

感じて、今に至っておるようです。

山林が約 93% ということで、耕地が約 2.1% で、非常に少ないところでございます。

東京都で、広さとしては奥多摩町、八王子市、檜原村の順に大きくて、檜原村は世田谷区の約 2 倍の広さを持っている。ところが、人口密度が、今年で 37 人ぐらいになっております。そんな非常に寂しいところです。

一時、戦争中に、集団疎開の子供たちが非常に多くて、7,000 人を数えたことがあったようですが、今現在は、哀れなように減っています。

それと、だんだん都市化が進んで、若い女性には都会へ行きたいということで、男性だけが残った。非常に寂しくなっているのが現状でございます。

それから、交通なんですけれども、東京都の都道が 3 本ばかりありまして、これから奥多摩の有料道路を経て、奥多摩湖へ出る道路が一つあります。この横に、都民の森が平成 2 年の 4 月に開園する予定です。それと同時に、この奥多摩有料道路は無料になるということで、ここへ人が大勢集まると考えており

ます。

なお、この有料道路は、1年間に檜原村側から約9万7,000台、奥多摩町側からは16万6,000台の車が通ります。この交通量から推測すると、ここを通る人は約60万人ぐらいいと言われているとされています。本宿部落での交通量調査では、バスで来てハイキングをされる人だとか、有料道路を通らない人を含めると、120万人ぐらいの人が、何らかの目的で檜原村を訪れていると考えられております。

また、檜原村の車の普及率は非常によくて、2.89人、約3人に1台所有しておりまして、車が非常に多いんですね。東京都のほかの地域も見てみますと、千代田区が1.5人に1台、中央区が2.5人に1台だそうです。これは会社の所有の関係かなと思います。そのほかは、例えば北区なんかは7.56人に1台しか車はないんですけれども、檜原村では約3人に1台ということで、千代田区、中央区を除くと、車の普及率が東京都で一番になる。逆に考えると、車がないと生活できないというのが現状だと思います。

なお、その車の普及率は、乗用車の登録台数で割らせていただきました。バスは、五日市町から来て、本宿で二つに分かれてしまうということで、すごく不便なんですね。ことしの4月から、南北のトンネルを掘ろうという計画がありまして、小岩部落から上川乗部落まで、何年かかるかわからないんですが、測量に入るようです。

上川乗部落から上野原町の中央道の高速道路につながるトンネルが、ことしの4月から開通する予定です。これと同時に、こちらへ多く人が入ってくるんじゃないかと考えられております。

檜原村の産業については、いろいろ資料を見ていただきますと、非常に林業が盛んだったり、いろんなことがあったのですが、コスト等で輸入材におされたり、燃料が木から石油になってしまったということで、打撃を受

けて、村民は、第二次産業、第三次産業にどんどん移ってしまったんですね。

第一次産業が35年に52.5%だったものが、あっという間に60年に5.7%まで減ってしまった。第三次産業は約51.2%ということで、人がどんどんみんな流れていってしまうということで、そういう産業に対して非常に厳しいという状況です。

一時、薪炭においても、西多摩地区の半分を生産していたのですが、今では炭焼きをしている人は専業の人は1人です。2人ほど兼業でおるようですが、非常に寂しい次第です。養蚕もだめということです。

コンニャクも、北谷で一部栽培しているようですけれども、これも非常にさびれてしまっている。ただ、ジャガイモが北海道の気候と非常によく似ているようで、おいしいということです。東京から約1時間半くらいで来られるので、農協では掘り取りをする人を集めております。こちらへんがちょっと脚光を浴びてきたんですけれども、金銭的に見るとごくわずかなもので、村おこしにはちょっとほど遠いという状況です。

観光については弘沢の滝ですね。先ほどスライドで見ていただいた冬に凍る滝ですが、あとは神戸岩とか、兜造りとか、秋川で遊ぶとか、そんなので、夏は非常に人が来る。ただし、この道路が渋滞して、村民も非常に困るという状況も発生しております。

医療は、ここの本宿に診療所が一つあって、あとは小沢部落と南郷地区に、北部診療所、南部診療所というのがありまして、1週間に1遍だけしかあけていない。あとは、開業医はだれもいないというのが現状です。だから、例えば奥多摩道路で事故を起こしても、本宿にある救急車が来て病院まで運んでいくのに、2時間ぐらいかかるというのが現状です。

教育は非常に熱心で、昔は、この小さな村に寺子屋が9つあったのですが、それが、ある時、8つになりまして、8つというのは、

第2表 産業別人口

(単位：人)

年 度		第一次産業	第二次産業	第三次産業	分類不能	計
昭和 35年	男	726	509	291	4	1,530
	女	334	20	146	2	502
	計	1,060 52.2%	529 26.0%	437 21.5%	6 0.3%	2,032 100%
40	男	534	563	407	0	1,504
	女	217	79	198	1	495
	計	751 37.6%	642 32.1%	605 30.3%	1 0	1,999 100%
45	男	339	709	432	0	1,480
	女	191	200	281	0	672
	計	530 24.6%	909 42.2%	713 33.2%	0 0	2,152 100%
50	男	205	626	527	1	1,359
	女	18	187	331	1	537
	計	223 11.8%	813 42.9%	858 45.3%	2 0	1,896 100%
55	男	183	610	540	0	1,333
	女	27	185	330	2	544
	計	210 11.2%	795 42.4%	870 46.4%	2 0	1,877 100%
60	男	94	598	569	0	1,261
	女	10	183	362	2	557
	計	104 5.7%	781 43.0%	931 51.2%	2 0.1%	1,818 100%

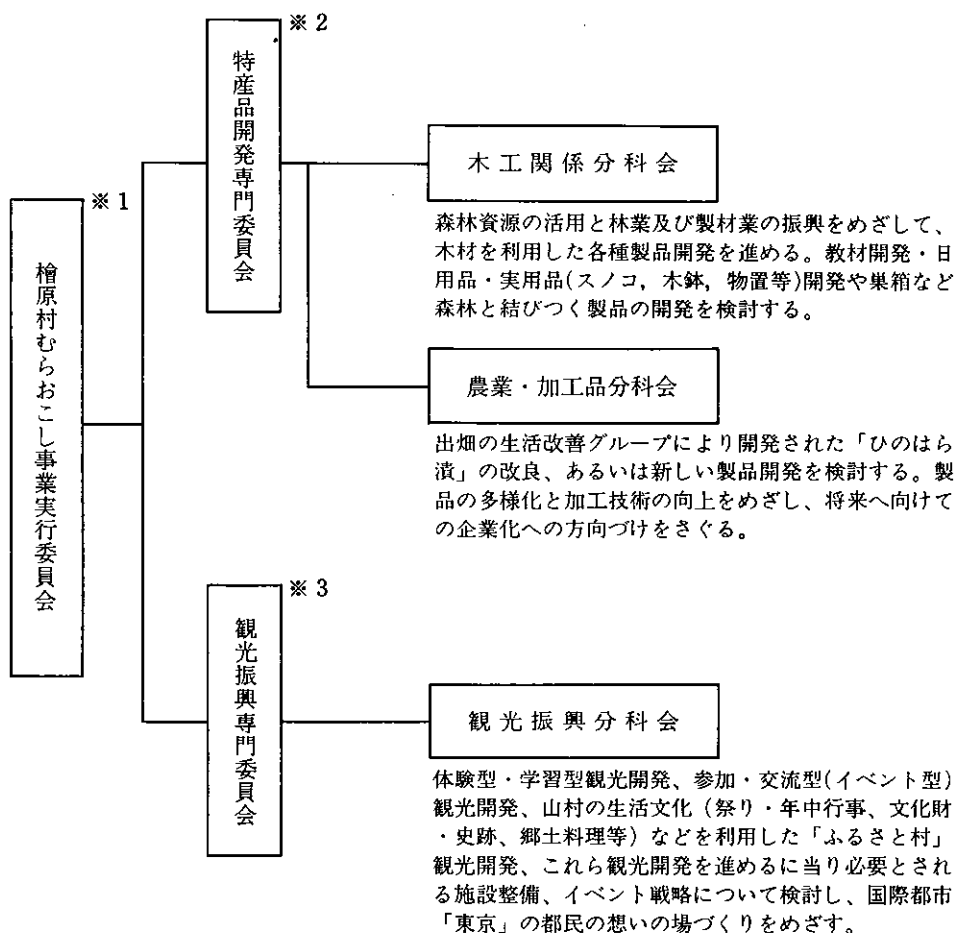
資料：国勢調査。

北谷では藤原、小岩、小沢、樋里、本宿にあって、南谷の方に行きまして、南郷、人里、数馬と、小学校が8つあったんです。それが統合で徐々に徐々に減りまして、今は本校が本宿に1つ、分校が数馬に1つあります。中学校は本宿に1つということで非常に集中化してしまっただけで、ところが、奥地からのバスがないもので、統合と同時にバスを入れて、子供たちを運んでおります。これらが檜原村の概要でございます。きょうは、村をわかっただけならば幸いです。そんな非常に寂しい村だということを頭に描いてください。

さて、檜原村の村おこしということで、昭和60年の8月から、役場職員だとか、五日市町、檜原村の商工会の青年部員だとか、観光協会とか、東京都の労働経済局、森林組合とか、手づくり会だとか、いろいろな人たちが

集まって、村おこしに向けていろんなものを解析しながら、檜原村に何が合うだろうかということで、専門委員会をつくりまして、木工関係だとか、農業・加工関係、観光振興ということで、いろいろ分かれて約12回研究会をやって、報告書が作られました。その研究会でいろんなことを考えて、じゃ、先に行動しようということで、いろんなことを考えながら、村民の意識を上げなきゃいけないとか、人材が不足しているとか、組織の体制を図らなきゃいけないとか、いろんなことを挙げて、実際には、それほど今の村おこしに対して、どうだという動きまでは至っておらないのが現状です。

現在まで役場の各担当者が、自分が関係している仕事については、これを村おこしにしようという動きはあるようですが、なかなか



※1 むらおこし事業の進め方、産業振興のための基本方針の検討

基本テーマの設定 ① 特産品開発の考え方・進め方 ② 観光振興のための方向づけ

※2 森林組合・林研グループ、農協、商工会青年部、生活改善グループなどを中心に農林・水産物及びその加工品の特産品化の検討

※3 観光協会、同青年部、商工会青年部、農協、大多摩観光連盟などを中心に観光振興のための具体策について検討

第2図 むらおこし組織の構成と活動内容

資料：『檜原村むらおこし'85』(五日市商工会、檜原村むらおこし事業実行委員会、昭和61年3月)

行政の方でも動き切れないのが現状のようです。

私が昭和54年に檜原村に入っていって、せっかく入ったんだから、何か足跡を残したいなということで、54年ぐらいから、小学生にサッカーの指導を始めまして、今現在、教えた子たちが二百四、五十人でしょうかね。ある者は、高校でレギュラーになって活躍し

ているようでございます。村全体の練習といっても、本宿部落でやるんですが、家から1時間ぐらいかけて子供たちが来るんですね。学校の半分ぐらいの子が、サッカーのクラブに入っております。

そんなことで、私は、村内の人と非常によく知り合うようになりまして、地元の一般の人よりも、かなりこの中に入り込んでしまっ

たというきっかけになったようでございます。そこで、サッカークラブをつくりまして、今現在もやっております。

次に、小学生と外国人を交えて、英語教室をやろうという発想は、例えば青梅市などへサッカーの試合に行ってみても、23区コンプレックスが親にあると同時に、子供たちにも非常にあって、また、普段山の中にいるので平らなところに行くと、なかなか実力が発揮できないというようなことがあって、やっぱり外国人と接して、非常にオープンマインドにさせなきゃいけないということを痛感し、たまたま私の子供がアメリカに留学していた関係から、外国人がかなりうちに出入りするもので、その人たちを交えて英語教室ということをして、本宿部落でやりました。

この企画も、学校とタイアップしてやろうと思ったのですが、なかなか学校とやるというのは難しくて、自治会を回って、約50人ぐらい子供を集めまして、英語教室を——1回なんですけれども、外国人と歌を歌ったり、もちつきをやったり、こんなことも企画して実行してみました。

次に、村始まって以来というのですが、「卑弥呼幻想」というイベントをやりました。これについては、そこにポスターがあるんですけども、このポスターも、自分らが先ほどの滝へ行って、夜、照明をつけて、写真を写してポスターにしたということで、私は、この実行委員長をやらせていただきまして、全村から若者を一挙に約40人ほど集めまして、実施をしたわけでございます。

これは、何しろお金をかけないで村おこしをやろうということで、どんどんいろいろな方面へ積極的に行きました。NHKなんかにもただで広告してもらおうということで、こんなことをNHKでちょっと流してもらえました。そのなかで、村長が過疎のことをちょっと話しているので聞いていただきたいと思います。

若者たちによる新しい村おこしのレポートをお伝えしましょう。これは、東京の檜原村の若者たちが、村おこしを目指して企画したイベントの練習風景です。

檜原村は、東京都の西北にあって、山梨県境に接する山村で、東京都では、離島を除けば、村と名のつくのはここだけです。かつては7,000人近かった人口も、若い人たちが次々と村を離れ、今は3,900人ほどに減っています。

こうした過疎化現象に歯止めをかけようと、村の若者たちが中心となって、既成の観念にとらわれない村おこしをしようと、人形とレーザー光線やシンセサイザーを使った「卑弥呼幻想」というイベントを企画しました。村始まって以来の大がかりな催しだけに、舞台づくりも、みんなで材料や労力を提供し合って行われています。

山田明男さんも、村おこしの中心的な役割をしている一人です。山田さんの本職は大工さん。現在、村内や八王子などで住宅建設を手がけています。芸達者な山田さんは、今回のイベントでもじっとしてられず、蛇と大臣の人形を使う役を引き受けました。

(山田)「自分たちは檜原が好きでいるんですけども、もっと外の人たちというか、やっぱり檜原のいいところへ来て、こういう場所をつくって見てもらって、皆さんに、ああ、檜原っていいところだと思ってもらって、皆さんを呼びたいなんて思っているんですけどもね」。

物語は、檜原村でツーリングを楽しむ若者たちの前に、古代の女王卑弥呼があらわれて、タイムスリップするというものですが、シンセサイザーやレーザー光線だけでなく、地元の人たちによる檜原太鼓も加わって、自然と人間、そして人形のおりなす幻想的な世界をつくり出そうとしています。

舞台上に登場する人形は、隣町の五日市町に住むNHKの『プリンプリン物語』などで知られる人形家友永詔三さんの作品です。友永さんは、村おこしにかけける檜原村の若者たちの熱意にほだされて、人形の制作から演出まで買って出ました。

(レポーター)「どうですか。本番ではかなりうまくいきそうですか」

(友永)「みんな踊り手の人とか、人形使いの人、それからこの太鼓の方、みんな張り切っているので大丈夫じゃないかと思うんですね。この蛇も、地元の大工さんが使ってくれるんですね。プロの人形使いと地元の人たちが、一緒に同じ舞台の中で共演するというのも、それも一つのテーマだと思いますけれどもね」。

(村長)「ものすごく私自身はうれしいと思っています。高齢化が進んで、人口が減って、過疎という言葉には非常に悲しい響きがありますよね。それが、最近、Uターン現象も起こってきましたし、若い人たちがいろんなグループをつくって、こういう催しをすることで、活力が戻ってきたという感じを持っています。自然に恵まれているし、空気はいいし、水はいいし、そういうこの村の特徴を活かしながら、村おこしは必ずできる、そして活性化というものも必ずできると私は考えています」。

檜原村の若者たちによる村おこしの新しい試みが、星空のもとで繰り広げられるのは今月12日、今週の土曜日です。(昭和62年9月6日、NHKニュースワイド)

そんなことで、檜原村のすばらしい自然を使って——自然というのは、「第一の自然」とよく言われているのですが、それに、ステージで作る「第二の自然」というのが、視響環境。シンセサイザーだとか、レーザーハーブというのは、レーザー光線がずっといって、何かに突き当たると音が出る。こんなもので新しい第二の自然をつくり、それを友永さんは見事に合体させてステージをつくってくれました。



これが非常に盛況で、檜原村では、昔から1,500人以上の人は集まらなかったといわれていましたけれども、このときにお金を払った人だけで3,000人以上だったので、村始まって以来ということでした。これも、地元のスタッフに、いろんな係をもってもらってやってみたわけですね。そうしたら、できるということが非常にわかって、これから村おこしというか、各グループに分かれて、いろんなものをやろうという発想が非常に出てきて、ミニコンサートだとか、いろんなことが催されるようになりました。

これまでは、クラシックなんかも、村長が「じゃ『第九』やろうよ」と言うのと「だいく？だいくというのは大工さんでしょう。家をつくるんだ」と言う。「第九」と大工と違う。それがわからないぐらいのレベルだったんですけれども、最近は非常に上がってきたようです。

そんなことをやりまして、今まで約10年、檜原にいて、週末は檜原に行って、平日は府中にいるということで、去年、家をつくった関係から、籍をまた檜原から府中にちょっと戻したのですが、また今年は、檜原に籍を移そうと考えております。

そんなことで、我々が見てきたことから考えると、第一に、農林業というのは、日本全国で言われているのと同じようで、沈滞しているんじゃないか……。

ここに、八ッ岳の清里村の清泉寮でのキープ(keep)という実験計画があるのですが、ちょっと本をお持ちしたんです。アメリカ人のポール・ラッシュという1897年に生まれた方で、戦前から立教大学に講師をされたり、日本にフットボールを導入されたり、清泉寮を建設された人ということで、清泉寮は、日本にアメリカの民主主義を教えようということで、何しろ富士山が見えるところじゃなきゃだめだということで、富士山周辺を探した。

ところが、富士五湖の周辺では土地がなか

ったので、甲府の県庁のそばの旅館の人に紹介されて、清里に来了。清里なら富士山が見えるということで、あそこで始まった実験計画があって、ここでは寒冷地の酪農なんかを非常に盛んにされて、この方は昭和54年に、82歳で聖路加病院で亡くなったんですけれども、日本人のために非常にいろんなことをされた。

持てるものは、貧困や飢えに苦しむ人々を援助する、最も望ましいノーハウを日本に示したということで、これに尾を引いて、今フィリピンで、やはりキープ計画というんですか、次には日本がやはりしてやらなきゃいけないだろうということで活動しているようです。

このご本を読まれた方はわかると思うのですが、まだ読まれていない方はぜひ読んでください。非常にすばらしい話が載っております。

この中に、やっぱり最善を尽くせと言うんですね。「Do your best and it must be first class」。最善を尽くして、しかも一流じゃなきゃいけないということで、一流じゃなきゃ、みんな人はまねしないよということが書いてあります。そんな本です。(山梨日日新聞社編『清里の父 ポール・ラッシュ伝』ユニバーズ社、昭和61年)

じゃ、何をやればいいのかというのは、我々にはよくわからないので、知識人だとか、外国人とか、何でもいいから、そういう人をよんで、発想を変えた奇抜なアイディアで、やっぱり檜原村を興していきたいと考えております。これといったものはないんですけれども……。

檜原村の原住民は農耕民族じゃないらしく、北谷の方に、縄文時代の遺跡が残っているんです。27カ所あるんですけれども、平野に住んでいた原住民と違って、山にいたんですね。今、焼き畑跡と土器だけしか残っていないということですが、平野にいた原住民とは違うということで、やはり農耕民族じゃない

んだよ。これは狩りをしてた民族というので、狩猟民族というのは、やっぱりアメリカ人もそうなんです、何かを勝ち取っていくということで、能力はあるんだけど、今までは非常に貧しい生活をしてたので、それで抑えられていた。今後は非常に伸びていく可能性があるんじゃないかと思っております。

また第二に、観光については、これも同じなんですけれども、やはり一村一品主義で、みんな一つ一つと言っていくと、よその村も、よその町もみんな同じようなものしかないんですね。そんなことで、山の特徴を活かして、すべてのものに、他の地域と差別化商品を出していかなきゃいけない。この中ではやはり本物をやっつけていかなきゃいけないんじゃないかということと、本物をつくっていく上で、どうしても開発には自然破壊がつきものなので、この破壊を最小限にとめなきゃいけないだろうということです。ディズニーランドのモットーというのは、四つあるんですけれども、ディズニーランドにどうして人が行くだろうかということで、ディズニーランドは、「常に未完成」、「常に非日常的」、「毎日が初演」、「常に新鮮でなければならない」と、いつもこういうことを考えているそうです。

何でもそうなんですけれども、常に未完成だということは、次に何かをやらなきゃいけない。

常に非日常的というのは、これは夢なんです。先ほど矢幡さんが夢とロマンと言われたんですけれども、夢を持っていると何か魅力がある。

毎日が初演というのは、人に感動を与えなきゃいけない。何でもそうなんですけれども、その感動と、それから常に新鮮さ。

ディズニーランドは非常にきれいで、ごみが落ちていない。非常に爽快感があるということで、この四つを何とか取り入れて、檜原村へ来た人の、リピーターをふやす。今は通

過していってしまう。一遍もうければいいという発想もちょっとあるようですが、そうじゃなくて、一遍来た人に、次にやっぱり口づてで来てもらう。これが一番大事だと私は思っております。

第三にその他としまして檜原村に関して言いたいことは、1つには都心から約1時間半、ここからでも約2時間みておけば十分行けるところなので、マルチハビテーションですか、こういうものを進めていくと非常にいいだろうと考えます。檜原村は斜面が多く建設費は非常にかかるかもしれないんですけれども、それでも十分可能であろうと考えます。

2番目に、山村留学制度を実施して、相互間のコミュニケーションを図り、自分らのレベルを上げないことにはだめだということで、4番目にも出てくるんですけれども、教育との関連があるかと思えます。

3番目に、地域の特徴を活かした芸術鑑賞のスペース。これは、自然が豊富にあるので、野外ステージだとか、木でつくるとか、平野部では見られないもの、こういうものをやりつくる必要があるだろうと考えています。私も、自分の小屋の横に30人ぐらい集まれる、子供も集まって楽しめるような小劇場をつくりたいと思っております。

4番目に先ほどの意識の高揚ということで、図書館——図書館がないんですね。コミュニティセンターもなしということで、これは近いうちに実現するかなと思うんですけれども、こんなことが、やっぱり活性化の起動力になるんじゃないかと考えています。

5番目に、スポーツも、グラウンドが一つで、スポーツは盛んじゃなかったんですけれども、サッカーから始まって、今はバレーボールだとか、東京都の大会だとか、かなりいい線まで上がってきましたので、これも、コミュニケーションの場としては必要じゃないかと考えています。

6番目には、診療所が一つしかなくて、治

療医学だけにとどまっているんですね。やっぱり予防医学と、次に健康増進の医学だと思うんですね。これは今の檜原村に欠けているものだと思います。健康のために、こういうものをやらなきゃいけないという医学を、社会教育の中に医療環境をつくらなきゃいかんと思っています。

最後、7番目に、地球を汚染から守り、子供たちによい環境を。これはやっぱり我々の責任だと思います。私も、今は自動車会社以外にちょっとほかの仕事をしているのですが、お金が入った晩には、少しでも森を買ってきたい。それに我々のグループを含めて、こういうものを買い取ってしまうというようなものも一つのアイデアかなと思っているんですけれども、いい環境を子供に残す。そのモデルゾーンとして檜原村があれば、今後、全国でこれを見に来るんじゃないかなということを考えます。そんなことが、今まで檜原村にいた体験から考えたことです。

しゃべりたいことはまだまだたくさんあるんですが、時間もかなり過ぎてしまいましたし、あとは、森川室長と石原さんが、都市に対して開かれた農村の整備を考えていこうという調査のなかで檜原村の調査もされまして、石原さんのレポートのなかで我々は新来者という扱いになっております。こういうのを見ていただくといいかと思えます。(石原豊美「都下山村への新来者」『農村総合整備調査』農村開発企画委員会、平成元年 所収)

○ 一つは、いろいろとこういうイベントとか何かをおやりになるときに、同じような環境にある檜原村周辺に、五日市町とか、その奥の方もずうっと地域があるわけでございますけれども、そこには都の施設もあったり、運輸省の施設、文部省の施設とか、いろいろできているようでございますが、そういう既存の施設と周辺の農村との施設利用についての機能分担というんですか、ここで星を見て、

ここでシンセサイザーの音楽を聞いてということについての横の違った市町村なり、違った施設の連携みたいなものについては、実際、こういう活動をやられて、何かお気づきの点がないだろうかというのが第1の質問なんです。

もう少し各市町村が、それぞれ総合施設とか何か言って、規格に合わないような施設をいっぱいつくって、未利用になっているというのをしょっちゅう感ずるんですけども、地域なり、性格のいろいろ異なった市町村同士が、もうちょっとそういう施設の利用を中心としてでも、もう少しうまいネットワークを組んでいけないだろうかという感じを持っておりまして、その辺、こういう仕事をおやりになっていて、何かお気づきの点がないかというのが第1の質問です。

もう一つは、この檜原村なんかで過疎化が進んで、林地や水田が管理されなくなったようなことによって、目に見えた災害とか何かが、具体的に起こっているだろうかという疑問なんです。その辺が、本当に起こっているよということなのか。いや、もう自然に戻って、それなりに保全されておって、田んぼや林地は、それなりに捨てておきゃ何とかなるよということなのか。住んでおられて、人がいなくなって、本当に管理されていないので、鉄砲水が出てきて怖いんだよとかいう感じになれるのかどうか、その2点をちょっとお聞きしたいと思います。

中島 それでは、まず最初に、よその施設との連携ということなんです。私の発想では、よその地域をいう前に、例えば檜原村の行政に何かを訴えるといっても、先ほども島添さんの話にあったようですが、なかなか我々のスピードと行政のスピードが合わないんですね。「卑弥呼」のときには計画をして、約3カ月で実施まで移っちゃったので、早すぎるんですけども、予算どりの問題だとか、いろんなことがあるんだと思うんですね。マ

イナスのことを考えると切りがないから、結局やめという話になっちゃうんですね。僕はやるしかないから、じゃやろうよ。やるんなら、よそを向いている人はもういいよ。去る者は追わずで、来る者は拒まずで、来る人だけやりなさいということで、何しろドーッと自分でやってしまった。引きずっていったというのが現状なんです。

本当は、もっと時間をかけて、例えば五日市町であるとか、隣の小菅村だとか、最近、小菅村は非常に興っているんですけども、そういうところと連携をとりながら、全体にまとめたものをやればベターで、もっと大きくなるかと思います。

施設をできるだけ使うといっても、一番困ったのは、駐車場の問題があったんですね。最近では、車に乗ってこられる方が一人か、乗っても二人なんですね。

3,000人の車は、じゃどうしようかという話になりまして、檜原村の中の人たちには、できるだけバスを利用してもらうように呼びかけてバスを無料で出しまして、あとは、5台置ける駐車場、20台置ける駐車場、グラウンド、そういうところを借りて、全部詰めて600台置きました。ただ、このイベントは夜なもので、五日市の警察も非常に反対されて、我々がやることに対して反対。照明だとか、防犯上のことだとかこういうことで反対だ、こういうことでできないだの、かなりいろんなことがあり、いろいろ勉強になりました。

場所については、例えば僕は檜原村にいたんだから檜原村でやる。サッカーを教えた関係もあって、子供たちに本物を見せたい、テレビじゃないものを見せたいという発想でした。檜原村のことしか考えてなかった。

次に2番目の質問で、都市化が進んでいくと荒れるということでは、奥多摩に有料道路ができて、これの残土の問題が、やはり川にまかれまして、それで、アユだとか、そのほ

かの魚に非常に影響を受けて、今でも、もうできてから20年ぐらいになるんですかね。それでももとにもどらず非常に悪い状況です。

林業が非常にもうからなくて、今は下枝も打っていない、荒れ放題という林がかなりあるんですね。そうすると、今まではえていた植物だとか、鳥だとか、虫がいられないわけですね。これは、昔から人工林でとっていたのなら、同じようにやっていくのが環境保護じゃないかなと考えます。環境保護というのは、抜かないということじゃなくて、同じようなサイクルでいったのなら、やっぱり同じように、金がかかっても続けていかないと、そこに生息していた植物や動物が将来見られなくなっちゃうんじゃないかと考えています。○ 都会の方が山村に、週末だとか何かで住んで定着される場合、マルチハビテーションの開発を提案されておりますけれども、一般的に、都会の人がそういうことをすると、非常に大変なのではないかというイメージを持っている方が多いと思うんですね。

もともと自分のふるさとに住むとか、そういうことで、農村の幾つかの規則といいますか、やってはいけないこととか、そういうものがあると思いますが、都会に住むということは、割合個人主義ですから勝手に住んでいる。農村から都会に来られる場合は、お金さえあれば大丈夫というようなところが若干あるわけですが、この逆の場合はいろいろとあります。中島さんの場合、そのあたり、どういう問題があったかということを教えてください。

中島 今のご質問ですけれども、やはり私と同じように、都会から行った人がいて、2、3カ月でUターンしてしまうという例もあ

るようです。僕の場合は、やはりこの中で何かを残したい。残すためには、はたから見たいんじゃないかということで、どんどん分け入って、逆に、地元の自治会とか、地元の人、その人個人とか、石原さんのレポートには書いてあるんですが、僕が「関所」と言っている家——一緒の会社の人だったからたまたまよかったんですけれども、関所に朝必ず寄った。朝、行き帰りに寄ったり、煩わしいかもしれないんですけれども、自分から積極的に入り込んで、中から檜原村の外を見たという感じで、先に人の中に入っていったという感じですね。それができないと、ちょっとまだ檜原村では長居ができなくて、長くて2年ぐらいで、やっぱりだめだという発想になるかと思うんです。

僕は、楽しみがあるなら、少しぐらい苦しみがあっても、それを乗り越えちゃえば、ずうっと楽しみが先にあるんだという考えで、どんどん積極的に入っていったタイプですね。この辺が、人によっては、やはり逆のこともあるかと思うんです。

檜原村の人は何か閉鎖的だと言われがちなんですけれども、案外、入り込んじゃうとそうでもないんですね。閉鎖的だなという形で対応すると、相手もそのように見えて、顔もそうなるから、向こうもそういう感じで……。

だから、非常に難しいかと思うんですけれども、今から檜原村とか、そういうタイムスリップをして、昔の村に入っていく人は、逆に自分から積極的にその中に入って行って、少しぐらい苦労があっても、それよりも得るものが多ければいいんじゃないかという発想でいけば成功すると思います。